

フランス革命の影響で ラテンアメリカが独立

19世紀前半に多くが独立した
ラテンアメリカ

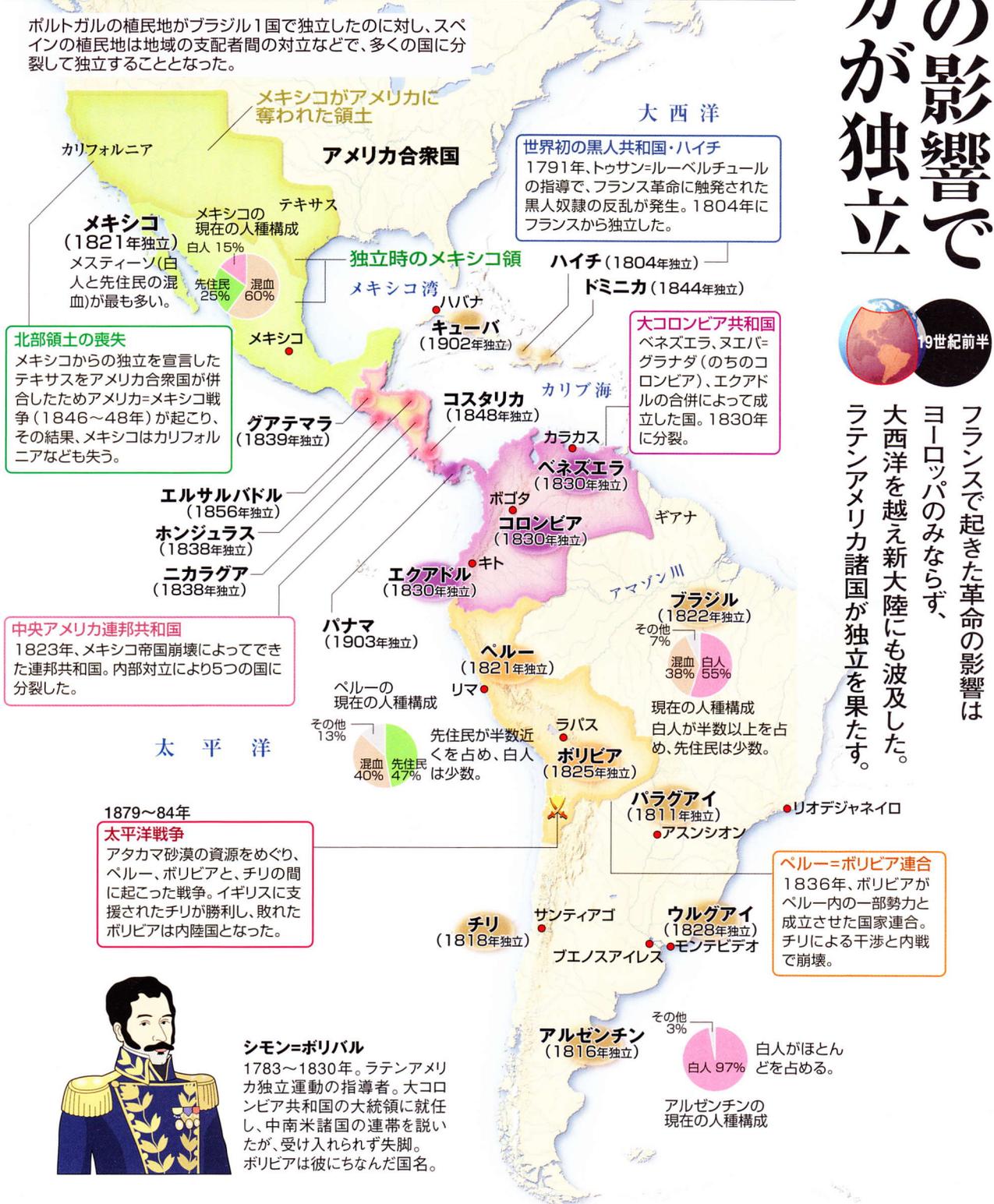
18世紀末のアメリカ合衆国独立（P99参照）やフランス革命の影響を受け、ラテンアメリカ各地では独立の気運が高まり、19世紀前半に相次いで独立を達成する。

先鞭をつけたのはカリブ海のハイチで、1804年に黒人奴隷が主体となって独立を果たした。続いてナポレオンによって本国が戦争に巻き込まれていたスペインの植民地でクリオーリオ（植民地生まれの白人）による独立運動が本格化し、ベネズエラ、コロンビア、アルゼンチン、ペルーなどが次々に独立した。メキシコは21年にクリオーリオが中心となって独立を果たしたが、46年にアメリカ合衆国との間で起こった戦争で国土の約半分を失った。その後は自由主義者や保守派などの対立による内戦や、外国の干渉などのため、混乱した状態が続いた。ポルトガル領のブラジルでは、本国から逃れたポルトガル王子が22年に植民地の独立を宣言し、帝政を敷いた。

独立したラテンアメリカ諸国では、植民地時代の大地所有制が存続し、極端な貧富の格差やカウディリーヨ（軍事的実力者）の抗争などで社会は安定せず、現在にいたるまでクーデタが頻発することとなる。

ラテンアメリカ諸国の独立

ポルトガルの植民地がブラジル1国で独立したのに対し、スペインの植民地は地域の支配者間の対立などで、多くの国に分裂して独立することとなった。



シモン＝ボリバル
1783～1830年。ラテンアメリカ独立運動の指導者。大コロンビア共和国の大統領に就任し、中南米諸国の連帯を説いたが、受け入れられず失脚。ボリビアは彼にちなんだ国名。